2022 年度 第 22 回
女子美制作・研究奨励賞達成・進捗報告書

谷中　美佳子

＜ 経歴 ＞

2023 年　Seed 山種美術館 日本画アワード 2024 入選
　　個展（小山市立車屋美術館）
　　個展（ギャラリー 絆和）’19、’21

2022 年　個展（Wagner Nándor Art Gallery 五角堂ギャラリー）
　　公益財団法人ワグナー・ナ ンドール記念研究助成金　受賞
　　女子美術大学 100 周年記念大村文子基金　女子美 制作・研究奨励賞

2021 年　個展（新生堂）’12、’14、’17
　　日本酒アートラベル（利守酒造）

2019 年　宇都宮美術の現在展（宇都宮美術館）

2018 年　個展（そごう川口店）

2015 年　第 3 回桜花賞展（郷さくら美術館）　館長賞

2013 年　東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復日本画修了

2012 年　東京藝術大学　安宅賞
　　三菱商事アート・ゲート・プログラム　奨学生
　　第 17~20 回チャリティーオークション　入選

2011 年　女子美術大学　卒業制作賞
　　女子美術大学芸術学部絵画学科日本画専攻卒業
　　第 15 回新生展　入選
　　第 65 回記念栃木県芸術祭美術展日本画部門　入選
　　第 6 回芸大アートプラザ大賞展　入選

2010 年　第 5 回栃木の 5 月の美術大賞展　奨励賞
　　第 12 回雪梁舎フィレンツェ賞展　入選
　　第 31 期国際瀧冨士美術賞　奨学生

2008 年　女子美術大学　女子美奨励賞
　　他グループ・企画展等多数

＜ Public Collection ＞

郷さくら美術館（東京）

日光二荒山神社中宮祠（栃木）

宝勝寺（栃木）

COCO farm&winery（栃木）

季譜の里（岡山）

＜ その他 ＞

平等院鳳翔館『扉絵の間』鳳凰堂扉絵デジタル復元画　アナログ補彩担当

宮のにぎわい山車復活プロジェクト山車部材菊飾り彩色修理・彩色見取り図表装担当

COCO FARM&WINERY　ここと あるシリーズ・エチケット担当

1.　制作・研究の動機・目的

命の”ぐるり”について考えを深めるとともに古今東西の天然素材を通して人と動植物が生きた痕跡を描いて遺すということを探求している。

友人、恩師、祖父母、そして自身の子どもとの辛い死別を経験し、死生観について考えるようになった。それは自身の癒しためでもあったが、同時に過去の人々がどのように死と向き合い生きてきたかを知るきっかけとなった。死と向き合うための方法或いは儀式の痕跡として絵が存在することを特に古い時代ほど感じた。

現在確認できている限りでは後期旧石器時代から人は絵を描いている。何のために描くようになったのかは憶測の域を出ないが何らかの観察と衝動があったのは確かだろう。この原始的な方法が徐々に分岐して現代の絵画になるわけだが、不思議なことに新しい技術だけではなく各時代の古い技術も共存し続けている。自然の土や炭素などを用いて描かれた洞窟壁画は現存し、その土や炭のような自然由来の絵具は現代も使われている。

悲しいことに国によっては古い技術は失われてしまうこともあるが、そうした世界各地の技術の方舟のような存在となり、東洋絵画の集積となっているのが日本画と捉えている。そうした古典技法を用いて描く理由は人が紡いできた技術と感動を体感し、また後世に遺していきたいという思いもある。つまり、用いる画材、描く行為全てが人、転じて命の軌跡と捉えてその方法で死生観を描いている。

題材は主に命の源である水、水と土を糧に新たに芽吹く植物、それらを全て包括する宇宙を再認識するための一部として空を描き、この三つの要素から″命のぐるり″を再構築する。その中にこれから大地に還る命、誕生する命、願いや祈りの形を借りて再構築した世界にそれぞれ添えて表現している。

死を受け入れ、生を喜び感謝する。相反する感情の混沌と向き合う装置となり、その先に私自身は癒され、また鑑賞者に何かポジティブな変化をもたらすことを願う。

小山市立車屋美術館の個展では郷里に伝わる神事の絵画化を試みた。間々田八幡宮の五穀豊穣や疫病退散を祈願する神事「間々田のじゃがまいた」、明確な起源を示す資料は現在発見されていませんが、「ジャーガマイタ、ジャガマイタ、シーガツヨウカノジャガマイタ」から推定できるように灌仏会に関わりが深いと考えられます。今回は昔の人々がどの様な思いでじゃがまいたに祈りを託したかをフィールドワークと伝承を参考に絵画化することにした。

ギャラリー絆和の個展では succession をテーマに制作した。succession とは連続、継承、生物学の用語としてはある場所で生物群集が一つの方向に向かい変化していき段々と安定していくことを表します。

継承して良い変化が起きる願いと生きていく中で様々なものに影響を受けて取り入れて個々の存在になっていく様子を作品と作者も含む見る人との関係性に重ね合わせてこの言葉を選びました。

2.　制作・研究活動

会期：2023 年 1 月 14 日(土)~ 1 月 29 日(日) 9:00~17:00 (入館 16:30)

会場：小山市立車屋美術館

神事「 間々田のじゃがまいた 」絵画化

左から

「 憂世の夢~卯月の蛇~ 」1650×950mm　絹本着色

「 花まつり 」1140×820mm　絹本着色

「 憂世の夢~皐月の蛇~ 」1650×950mm　絹本着色

小山市立車屋美術館にて神事「間々田のじゃがまいた」をテーマとした個展を開催した。第 8 回「10×15 の世界コンテスト展」の併設展示ということもあり幅広い年齢層が来館し、特に未就学児には古典的な技法、画材にふれる機会となり、その土地に伝わる神事を伝えるきっかけとなりました。来年度も同美術館の企画展にて展示するお話をいただいており地域の文化振興に貢献することができました。

間々田八幡宮の五穀豊穣や疫病退散を祈願する神事「間々田のじゃがまいた」、明確な起源を示す資料は現在発見されていませんが、「ジャーガマイタ、ジャガマイタ、シーガツヨウカノジャガマイタ」から推定できるように灌仏会等をはじめとする土着の古い風習と関わりが深いと考えられます。現代は五月のこどもの日に行われます。今回は昔の人々がどの様な思いでじゃがまいたに祈りを託したかを考えながら制作した。その祈りが蛇(龍)に変幻していき卯月の蛇には桜を、皐月の蛇には藤を添えて五穀豊穣や疫病退散、そして子ども達の健やかな成長を祈願して制作した。

季節の花々を白で描きました。どの花も白く描いたのはまだ咲いていないこれから芽吹く無垢な新たな魂の表現をするためです。

光の当たり方によって金箔と岩絵具が輝くことで荘厳性を演出しました。

会期：2023 年 3 月 18 日(土)~ 3 月 26 日(日) 11:00~17:30

会場：ギャラリー絆和

日本家屋内の自然光を取り入れた展示の可能性

ギャラリー絆和の個展では人が紡いできた文化文明のなかで願いや幸福のシンボルとされた瑞獣や草花をモチーフとして描いた。その作品を現代の住空間に飾れるように再構成を試みた。特に日本家屋内の自然光を取り入れた展示の可能性に着目し、自然光に左右される画材の特性を活かし、時間帯でそれぞれ異なる良さを見ていただけるように描いた。

「 遷移 」100×150mm　絹本着色

個展のテーマとした succession を絵画に当てはめて再構築した。
旧石器時代から現代までの絵画の変容を abstract、ecorative darts、fine art の三層の絵画として捉えてそれぞれを
abstract　⇒　自然、衝動による能動の跡
ecorative darts　⇒　知覚した対象の様式化
fine art　⇒　魂
とした。その上で思想としては存在するが、この世に実在しない生き物のかたちを借りる。曖昧な共通認識の上で存在し、同一ではないが国境を越えた共通項がある。それぞれ違う理想を夢みるが自分自身も含め誰かの幸せを願う心のかたちであり、これらを自身の絵画とした。

また、コンセプトに止まらずに画材の特性を活かして物理的にレイヤーのように表現し、視覚できるようにした。

「 浮世の夢-聳孤- 」320×150mm　紙本着色

一層目は鳥の子紙、垂らしこみにより自然、衝動による能動とした。二層目は雁皮紙、砂子を蒔き、垂らしこみから図様を起こして知覚した対象の様式化とした。三層目は典具帖紙、更にそこから展開させて魂の込められた作品として完成させた。
三層目が一番手前ではあるが薄い和紙の特性から一層目の垂らしこみまで全て透けて同時に見ることができる。同作品上で先述した abstract、decorative arts、fine art を行われた上で contemporary art 作品とした。

「 pulsus 」150×100mm　絹本着色

どちらの展示も好評いただき広く伝統や芸術にふれてもらえる機会となりました。

3.　結び

賞を頂いたおかげで制作に専念することができ、郷里にて予定していた個展の質をより高めることができました。

私は栃木県小山市の出身なのですが、小山市はこれまで農業や工業に比べると文化芸術振興の取組みに積極的ではありませんでした。今回の展示も可能な限り美術館の方々は配慮してくださいましたが、作家負担の個展でしたので美術館からは新作の要望はありませんでした。しかしながら郷里で個展を開催できるご縁、併設展のため来場者の年齢幅が広いこと。郷里に伝わる神事の絵画化を試みたいと考えていたので新作として「間々田のじゃがまいた」を制作しました。私自身ルーツを辿る機会となり、ご来場いただいた皆様にも学びと作品ともに喜んでいただけました。特に嬉しかったことは 1 歳のお子様が作品の前に何度も訪れては手を万歳しながらよく見てくれたのが微笑ましく嬉しかったです。また、来春同美術館の企画展にて再度の出品依頼をいただきました。また、今回のご縁から小山市の文化芸術振興に微力ながら参加しております。これまでは作家個人の活動に重点をおいていましたが、こうして地方の文化芸術振興にも積極的に取り組みたいと思いました。

私には画家を志すもシベリア抑留や家を継ぐため等、時代に翻弄され描くことを趣味でとどめた祖父がいました。その祖父が大切にしていた土地から直ぐ近くの場所で個展を開催できたことから時代の流れの変化に感謝する機会となり、改めて作家活動とともに文化芸術振興をうたえる時代を継続する重要性を認識しました。

ギャラリー絆和の個展では作品の基底材に仕掛けをして正面からだけではなく様々な角度から楽しんでいただくことができました。また、それをきっかけに和紙や絵絹、絵具の特性についても興味をもっていただける機会となりました。

素材研究を作品に昇華すると同時に展覧会を通して知らない方にも知ってもらいたいと思いました。専門的に学んでいると盲目になってしまうので視野を広く持つことの大切さを改めて実感しました。

今後作家として精進するためにはギャラリーにとどまらず新たな展示施設にて個展等の制作発表をするとともに SNS を利用した情報発信、オンラインとオフライン両方の活用が大切です。また、作品そのものを良くしていくのは当然ですが作品が完成するまでの物語や制作方法の公開も芸術を伝え紡いでいく上で重要だと考えます。今は Instagram やワークショップ等を利用して行っています。

また、他領域とのコラボレーションも必要です。現時点で実現しているのは古民家での展示を通して歴史的建造物、陶芸作家さんの作品とのコラボレーション等です。

どちらも現状できる最大限で活動をしていますが規模はまだ小さいです。牛歩ではありますが、一つ一つの経験から学び規模を拡げていきたいです。

この度の御助成に深く御礼申し上げます。